

## 「原因」と「理由」の彼岸への問い

——ハイデガーの哲学的企図の再吟味——

古荘 真敬

あえて簡潔に要約するならば、ハイデガーの哲学的企図の核心は、「在るものは在る」という事実を、その単純な事実の相それ自身において、すなわち、ある没根拠の原事実として、了解する道を模索することのうちにあったと言いうるだろう。

「何故そもそも或るものが在って、むしろ無ではないのか？」というライブニッツの問いは、この意味において、彼が、近世哲学の形而上学的達成のうちから受け継いだ最も核心的な問いであったが、ハイデガーは、この問いに、あらゆる「原因」や「理由」の概念から解放された仕方で応答するための場を開こうと試みたのである。すなわち、私の「実在原因」としての神を思惟することでも、この宇宙の実在という事実の「十分な理由」としての神の知識・意志・力能などを思惟することでも、はたまた、唯一の実体としての神即自然の「自己原因」を思惟することでもない仕方で、ただ「在るものが在る」という単純な事実を、没原因かつ没理由の原事実それ自身として了解する場所を開くことが、彼の課題であった。そのような思惟の在り方を模索することにおいて、ハイデガーは、西洋哲学の形而上学的達成の核心に本質的な空所を穿ち、それを通じて、彼自身の意図においては、いうところの「第一の始元」以来の西洋形而上学全体を「別の始元」へと移行させようとも志したのであった。

本発表は、如上の哲学的努力の意味ないしはその限界を、今一度真摯に考察することによって、いわゆる「哲学の終焉」なる危機に際しての「思索の課題」の探索を狙うものである。というのもハイデガーの思惟は、今日、哲学の生存権をめぐる争い合っているかにもみえる「自然主義」と「反自然主義」の対立がそもそも生じている議論の地平を、「原因」と「理由」の概念を二つながらに超克することによって、止揚しようとするものであったと、評価されうるように思われるのである。

では何故、ハイデガーの思惟においては、「原因(causa)」という概念が忌避されることになったのであろうか。その最大の所以は、*causa efficiens*という概念形成の基底をなしている「存在＝被制作性」という存在了解を、彼が、頽落した思考形態と見なしたことにあった、と言えるだろう。「存在に立ち去られてあること(*Seinsverlassenheit*)。それはまず最初にキリスト教とその教義学のなかで起こった。それによると、すべての存在者は、その根源において創造された存在者(*ens creatum*)として説明されており、そこでは創造者が最も確実なものであり、すべての存在者は、この最も存在者的なる原因の結果である」(GA65, 110)。たとえばそのように、彼は1930年代中葉の『哲学への寄与』論稿のうちで考察しながら、「存在論が存在神論へと仕上げられることによって、いかにして根本的な問いが、最終決定的に脇に退けられてしまうこととなるのか」を明らかにしようとしていた。そして、そうした「存在・神・論的体制」によって刻印された「原因」概念は、結局のところ、人間の表象的な知を規定する「理由を与えること (*rationem reddere*)」への要求に

応じて（あるいは、ともすれば「合理的な行為の自己知の空間」の拡張において）、「在るものが在る」という野生の事実を飼い慣らそうとする人間の態度に由来していることを示そうとしたのが、いわゆる後期思想にいたるまでのハイデガーの西洋形而上学史批判の根本的な趣旨であった、と言って、おそらく大過あるまい。

とはいえ、こうした一刀両断式の哲学史解釈（あるいは「原因」「理由」概念の解釈）の正当性を疑わずにいられるのは、いまどき珍しいハイデガー教信者くらいのもかもしれない。たとえば、まずもって、いわゆる「原因」ないし「因果性」という概念は、行為の「理由」の自己知を核心とするような「意図」の概念の地平とは直交するその超越的・垂直的な内実を本義とするようにも思われ、そのような観点から、ハイデガーによる「原因」「理由」概念の解釈の有効性が、批判的に吟味されなければならないだろう。そして、そのうえで、ハイデガーの思惟の道を決定していたのは、ある種の盲目的な「反主知主義」にすぎなかったのかどうか、仮にそうであるとすれば、そのような「反主知主義」に、いかなる意味、いかなる将来がありうるのかが、真摯に考察されなければならないだろう。

そうした問題意識のもと、発表者は、ハイデガーの「反主知主義（のように見えるもの）」の最も急進的な内実を、「存在者としての存在者」という根源的な同一性概念を主導した「ロゴス」概念を脱臼させようとする果敢な企てのうちに見出しつつ、その多義的な含意について考察することを試みようと思う。